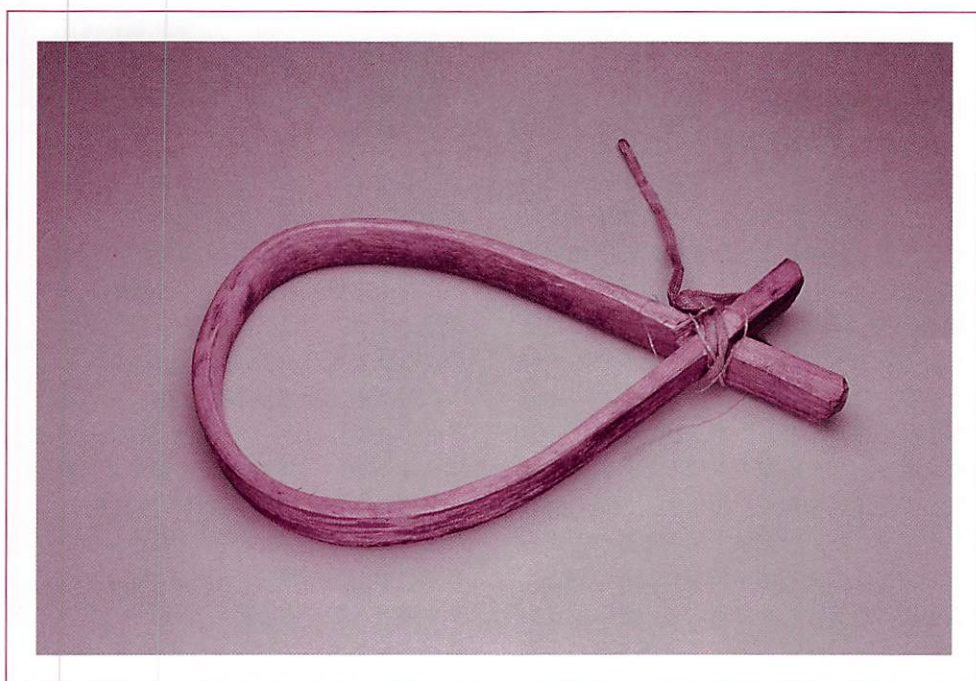




北方民族博物館だより

No.88



H22.21 トナカイ用シラカバ製首輪 ウイルタ ロシア・サハリン 全長 34cm

北方諸民族のトナカイ飼育は、大規模な群れをもち、肉や毛皮を積極的に利用するツンドラ型と、いくぶん小さな群れで、使役獣として管理するタイガ型に大別される。このうちサハリン島北部のウイルタのトナカイ飼育はタイガ型に分類され、トナカイに騎乗し、そりを引かせもしている。

群れの何頭かのトナカイの首には、シラカバ製の首輪や、鈴がつけられる。この首輪には、ウイルタ語でチャーンガイとよぶ木（棒や枝）をひもでぶらさげる。チャーンガイはちょうどトナカイの前足の前にきて脚にぶつかるので走りづらくなる。逃走防止。

目次 Contents

- 1 表紙 トナカイの白樺製首輪
- 2 企画展「アイヌ語地名を歩く—山田秀三の地名研究から 2013・冬 網走／オホーツク」
- 3 講演会「アイヌ文化と環境」／講座「アイヌ語地名研究と山田秀三」
- 4 ロビー展「山口未花子写真展 カスカ～カナダ・ユーコンの森の狩猟民」
- 5 講習会「カナダの狩猟民カスカのビーズ刺繍ブローチ」／講演会「グレートジャーニーとその後の旅」
／「調査報告 2012年度サハリン調査」
- 6 INFORMATION

企画展

アイヌ語地名を歩く

—山田秀三の地名研究から

2013・冬 網走／オホーツク

2013.2.2-4.7

このアイヌ語地名に関する企画展は北海道立アイヌ民族文化研究センターと当館との共催で開催されました。

本展は、アイヌ語地名研究の第一人者である山田秀三氏（1899～1992年）の調査資料をもとにアイヌ語地名の世界を紹介し、アイヌ文化への関心と理解を図ることを目的として企画されました。

山田秀三氏の調査研究資料は1994（平成6）年にご遺族から札幌市の北海道立アイヌ民族文化研究センターに寄贈され、同研究センターではこれを「山田秀三文庫」と名づけ、整理・保存作業を進めるとともに、2004（平成16）年度から、資料の公開に向けた取組の一環として、道内各地で、企画展「アイヌ語地名を歩く—山田秀三の地名研究から—」を開催してきました。今回は、網走市及びオホーツク管内に関する、山田氏による地名調査の記録や調査に用いた地図、調査の際に撮影された写真などの展示をとおして、網走市を含むオホーツク管内のアイヌ語地名の世界を紹介しています。



展示会場

展示室入口には1897（明治30）年頃の陸軍陸地測量部による網走周辺の地図（縮尺5万分の1）と1967（昭和42）年の国土地理院による網走周辺の地図（縮尺同）が比較できるように並べて展示されました。両者を比較すると市街地や道路網の発達が如実に示されていることがわかります。また、後者の地図ではアイヌ語地名の記載が大変少なくなっていて、アイヌ語の意味とは無関係な名前に変わっている地名が大変多くなっていることもわかります。



展示を解説する小川正人氏（中央）

展示内容は、山田秀三氏が調査で撮影した写真やノート、絵葉書、書き込みのある地図類、それらをわかりやすくまとめた解説を加えた、約200点のパネルが掲示され、さらに山田秀三氏の著作コーナーも設けられました。初めに山田氏の略歴、年譜・調査歴、著作と解説、オホーツク管内の主な調査歴が示されています。

以後の展示は現地調査に従って、「雄武～紋別」、「遠軽～サロマ湖」、「置戸～北見～常呂～能取湖」、「美幌～女満別～網走湖」、「網走市街～藻琴」、「濤沸湖～浜小清水」の区分で各パネルが掲示されています。

また、小中学生など初心者向けにアイヌ語地名の基礎を学ぶ「学習用パネル」も10枚掲示されています。

来館者への配布資料も充実していて、8ページのカラー印刷の企画展パンフレットでは展示をよりわかりやすく解説しています。さらに北海道立アイヌ民族文化研究センター作成のアイヌ語地名やアイヌ文化に関する9種類の小冊子なども用意されています。

展示初日の2月2日（土）には、北海道立アイヌ民族文化研究センターの古原敏弘研究主幹、同・小川正人研究課長による展示解説講座が開催され、山田秀三氏の足跡やアイヌ語地名の意味、地形による共通性などをテーマとした大変興味深い講演と展示解説がありました。

また、関連事業として3月2日（土）、小中学生を対象に「はくぶつかんクラブ 楽しいアイヌ語地名教室」（講師：山田祥子当館学芸員）を開催しました。地名につかわれるアイヌ語をキーワードにして遊ぶゲームや、お絵かきなどをしました。また、大きな北海道の地図のなかからアイヌ語の「ナイ」と「ペッ」由来の市町村名をさがして色を塗る作業をとおして、身近な地名にアイヌ語が隠されていることを学びました。

本企画展は各地のアイヌ語地名の意味やすでに現在の地図では失われたアイヌ語地名の存在についても知ることができる絶好の機会となっています。

（学芸グループ 渡部 裕）

講演会

アイヌ文化と「環境」
—私が学んだことを通して

2013. 2. 9

講師 本田 優子氏

(札幌大学・教授/副学長)

講師の本田優子氏は大学卒業後、日高管内平取町二風谷でアイヌ文化伝承に取り組んでいた萱野茂氏に共鳴してアイヌ語教室のアシスタント、後には講師を務めた経験をもっています。冒頭で自分の軸足は1983～1994年の二風谷住民としての生活体験であり、学んだことも感じた疑問もそこにはあるのだと述べられました。

本田氏は現在、アイヌ文化とその環境観とされている「自然とともに生きるアイヌ」像は幻想として押しつけられた環境保護運動のシンボルではないかと述べ、幻想を打破することで「アイヌの人たちは楽に息ができるようになる」とも述べられました。

このようなアイヌ文化に対するステレオタイプのイメージはどうして生まれたのかと考え、「アイヌの人口は?」「アイヌ語で会話する人の数は?」「アイヌの生活実態は?」(選択回答:「昔ながらの生活が多い」「昔ながらの生活をしている地域もある」)について大学生へのアンケートを行いました。それに対する回答を集約すると、アイヌの人たちのイメージは「ごく少数の人びとが、いまなお伝統文化を守って生きている」ということになると分析し、アイヌの現状を意識的に教える必要があるとされました。

それではアイヌの伝統的な生活のなかには、現代のわたしたちが参考にできることはないのでしょうか? 本田氏は、二人の研究者、坂田美奈子氏と児島恭子氏それぞれによるアイヌ口承文芸の分析から導き出された「礼節を知ること」「礼儀を欠かないこと」の二つをあげて講演を終えられました。



講壇に立つ本田優子氏

(学芸グループ 渡部 裕)

講座

アイヌ語地名研究と山田秀三

2012.8.25

講師 伊藤 せいち氏

(アイヌ語地名研究家・当館研究協力員)



伊藤せいち氏

企画展の関連事業として、アイヌ語地名の専門家・伊藤せいち氏をお招きし、山田秀三氏の研究について解説していただきました。

本講座の最初に、小川正人氏(北海道立アイヌ民族文化研究センター・研究課長)から講師の伊藤氏の経歴や研究をご

紹介いただきました。伊藤氏は40年間小学校教師を務めながら、北見・網走を中心とした地域史・アイヌ語地名・北海道史・地域の文化などについて調査・研究され、数々の著書や論文を発表しておられます。アイヌ語由来の地名にとどまらず北海道の日本語地名についても詳しく検討され、綿密かつひろがりのある研究が高く評価されています。伊藤氏はまた、研究のつながりを大切になさってきました。その姿勢は、山田秀三氏との交流にも現れています。北海道立アイヌ民族文化研究センターが所蔵する山田秀三文庫のなかには、山田氏と伊藤氏のやり取りが多く記されており、その交流の深さがわかります。

伊藤氏の解説では、地名と地域の歴史・文化とのむすびつきを強調された後、山田秀三氏の研究についてお話しされました。山田秀三氏の最初の研究は、東北地方のアイヌ語地名が対象でした。東北の地図に「ナイ」「ペツ」地名の多いことに気づき、地図のなかの地名で「ナイ」がつくところに赤で点をつけていくという、地道な作業から始まったそうです。そして、現地を訪れて確認するという実証的な研究方法を確立しました。さらにその関心は、地名に隠されたアイヌ語からアイヌの人たちの暮らしへと広がってゆきました。

山田氏の文章は一つ一つがすぐわかるように「あったかい」言葉で書かれている、と伊藤氏は言います。訪れた土地の人びととの交流で育まれた地域への親しみや、知識の深さが、読み手にわかりやすい言葉で表れたのだと思います。

(学芸グループ 山田 祥子)

ロビー展

山口未花子写真展

カスカ～ユーコンの森の狩猟民

2013.1.8-1.27

1月8日から1月27日までの日程で、「山口未花子写真展 カスカ～ユーコンの森の狩猟民」を開催しました。

山口未花子氏は、現在東北大学東北アジア研究センターで教育研究支援者をしている文化人類学者で、カナダのユーコン準州に暮らす民族・カスカの人びとと自然との関わりについて、調査研究を続けています。今回の展示では、広大なカナダの自然とカスカの人びとの狩猟の様子や、子どもたちへの民族文化の継承の状況などを、山口氏の写真で紹介しました。また1月20日には山口氏による解説会を開催しました。



展示を解説する山口未花子氏

2009年時点での法律でファーストネーション（イヌイトとメティスを除くカナダ先住民）に認定されているカスカは2,176人ですが、認定されていないカスカの人口はさらに多いものと予想されます。カスカはカナダのユーコン準州（アラスカの右隣）、北西準州、ブリティッシュコロンビア州にまたがる地域で暮らしています。人口のほとんどはユーコン準州の州都ホワイトホースに集中しています。ここは緯度でいうと北緯60度くらいの、亜極北針葉樹林帯になります。主食となる植物種が育たず、人の一日を支えるほどのカロリーはないため、ビーバー、ヘラジカ、ウサギなどの動物が主食となり、またその毛や皮革も利用されていました。

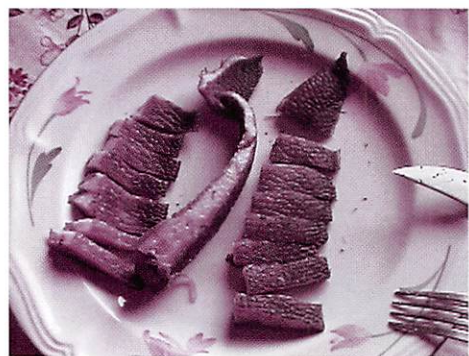
カスカの多くは親族単位でワナ猟のためのトラップライン（約200～1400km²の面積をもつ行政上の区画）を保有し、自分のトラップラインの中に立てた狩猟小屋が、森の中の活動拠点になります。

エルク（アメリカアカシカ）、ヘラジカはカスカの主食といってもよい動物です。夏季には川を用いたエルク、ヘラジカの狩猟も行われます。川で狩猟するメリットの一つは解体するのに近くに水があるということです。ヘラジカ

の血や胃の内容物等を川で洗うため肉食の魚が多く集まってきます。そうした魚を釣るのも、狩猟の後の楽しみの一つです。

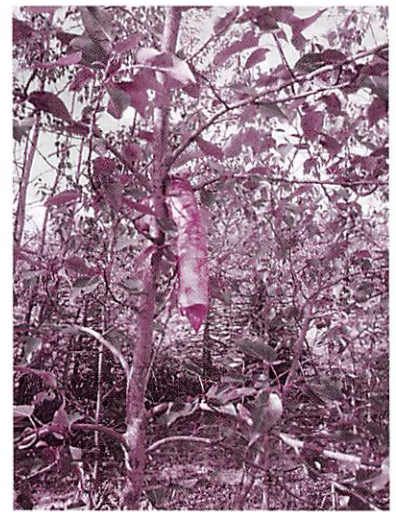
カスカの人びとにとって、狩猟とは単に肉を得るための活動ではなく、捕獲する動物やメディシン・アニマル（自分の守護霊のような存在）との交渉でもあります。狩猟の成功は、狩猟者の技術や知識が動物より勝ることを示すものではなく、動物との交渉の結果、動物が自らの体を狩猟者に贈ることに同意したことを示すものなのです。動物のスピリットが宿ると考えられる気管や足の骨を森の中に残しておくことは、動物への尊敬を示すことであり、次回の狩猟においてもまた動物と巡り合うことを確実にするための儀礼として、多くの人が実践しています。

ビーバーもカスカにとって重要な動物です。春先にはライフルで、冬にはワナでビーバーをしとめます。ビーバーの主食はポプラなので、フレッシュなポプラの枝とともにワナを仕掛けると、高い確率でビーバーがワナにかかります。肉や毛皮のほか、特にビーバーの尻尾が珍味としてカスカの人々に愛されています。切り取った尻尾をたき火であぶると表皮が風船のように膨らむので、これを手で剥いて、内側の身の部分をさらに茹でて食べます。



ビーバーの尻尾を食べる

学校ではカスカの伝統文化のワークショップも開催されています。山口氏が写真を撮影した日はヘラジカの皮なめしの方法を古老が教えていました。初めてこの作業をしたという子も多かったです。しかし一度ナイフを手にとって作業を始めると、止められないくらい面白がっていたということです。（学芸グループ 笹倉 いる美）



ヘラジカの気管を木の枝に吊るす

講習会

カナダの狩猟民カスカの
ビーズ刺繍ブローチ

2013.1.20

講師 山口 未花子氏

(東北大学東北アジア研究センター・教育研究支援者)

1月20日には山口未花子さんの指導で、「カナダの狩猟民カスカのビーズ刺繍ブローチ」を開催しました。



材料は、ヘラジカのなめし革、ビーズ、糸、ウサギの毛皮で、道具は針が二本です。

講師の山口さんは、鳥と花の二つの図柄を用意してくださいました。

はじめに、図柄の型紙を選び、ボールペンでヘラジカのなめし革に写します。次に針に糸をとおします。1本目の針はビーズを通すためのもので（糸は二本取り）、もう1本の針はビーズをとめるためのものです（糸は一本取り）。

最初に枠の部分からつくっていきます。好みのビーズを一方の針にすくい、図柄にあわせて置いていきます。そして、ビーズ二、三粒ごとに、もう一方の針に通した糸で留めてゆきます。枠部分ができたら、内側をビーズで埋めてゆきます。ビーズ刺繍ができあがったら、ふちに毛皮を貼って、後ろにブローチ金具をつけて完成です。

(学芸グループ 笹倉 いる美)

講演会

グレートジャーニーとその後の旅

2013.2.17

講師 関野 吉晴氏

(冒険家/医師/武蔵野美術大学・教授)

アフリカで誕生した人類は、アジア、北アメリカへと拡散し、約1万年前に南アメリカに到達したといわれています。関野氏は、1993年から2002年にかけて、人類の拡散した道筋を逆方向にたどる旅・グレートジャーニーを敢行しました。その壮大な旅の経過はテレビ番組で放映され、全国の視聴者に感動を与えました。

関野氏はグレートジャーニーの完遂後も、新たな挑戦を続けています。人類が日本列島にやってきたルートをとどる旅、シベリアから稚内へと至る「北方ルート」、ヒマラヤから対馬へと至る「南方ルート」、インドネシアから石垣島へと至る「海のルート」です。本講演会では、グレートジャーニーを振り返るお話ののち、その後も続く挑戦の数々について、迫力ある写真・映像とともにご紹介いただきました。

本講演会は、関野氏が網走においてになる報せを受け、緊急で企画しました。広報の期間はわずか2週間でしたが、網走市内外から多くの方が来場され、関野氏の穏やかなお人柄からあふれる壮大なスケールのお話に夢中になっていました。



講演する関野吉晴氏

(学芸グループ 山田 祥子)

調査報告 2012年度サハリン調査



時間をさかのぼりますが、2012年8月26日～9月15日にロシア・サハリンの民族調査をおこないました。特にウイльта民族の言語、民族資料についての情報を収集しました。

帰りの経由地である州都ユジノ・サハリンスク市では、9月13日、世界人権宣言ウイльта語訳のプレゼンテーションイベント（写真）に立ち会うことができました。

現地受入機関となったサハリン州立郷土博物館をはじめ、調査にご協力くださった一人ひとりに感謝します。なお、本調査は岡田宏明基金を受けておこなわれました。

(学芸グループ 山田 祥子)

春のロビー展
北海道の古地図展
伊能図と北海道の地図の歴史
 平成25(2013)年4月27日(土)～
 6月2日(日)
 当館ロビーにて、観覧無料

伊能忠敬の作成した伊能図の北海道東部の部分図をはじめ、古地図により北海道の地図の歴史を紹介します。

*期間中に展示解説会、講演会を予定しています。

北海道立北方民族博物館研究紀要 第22号

Nobuhiro KISHIGAMI "On Sharing of Bowhead Whale Meat and *Maktak* in an Inupiat Community of Barrow, Alaska, USA"

中田 篤「地球温暖化とトナカイ牧畜」

山田祥子・笹倉いる美「北海道立北方民族博物館所蔵のウイльта資料 I : 対応する北方言の語彙を中心に(3)」

丹菊逸治「ニヴフ語の漿果の総称について」

E. A. アレクセーエンコ／荻原真子訳「ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵のクマ祭資料(1):「ケートのクマ崇拜」」

E. A. アレクセーエンコ／荻原真子訳「ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵のクマ祭資料(2):「ケートのクマ祭にて」」

兼城糸絵「高倉浩樹編著『極寒のシベリアに生きるートナカイと氷と先住民』」

笹倉いる美「のりすすと2012: 北方研究データベース」

INFORMATION

行事報告

◆10～12月、網走市内の小学4年生を対象としたミュージアムスクールを開催しました。今年度は、網走市の呼人小学校、南小学校、西が丘小学校、東小学校、白鳥台小学校が参加しました。本事業では、当館学芸員が小学校を訪問する出前学習と、児童が博物館を訪問する体験学習の2回に分けて行っています。

なお、本事業は(財)山田記念青少年育成財団の援助を受けています。

◆12月8日(土)、講座「方言って何だろう～サハリンのウイльта語を例に」(講師:山田祥子学芸員)を開催しました。

◆12月26日(水)、「ロビーコンサート2012～青少年のための室内楽の夕べ～」(主催:(財)北方文化振興協会、(財)山田記念青少年育成財団)を開催しました。札幌交響楽団員による弦楽四重奏をお楽しみいただきました。

◆1月12日(土)、はくぶつかんクラブ「フェルトで作るモンゴルのゲル型小物入れ」(講師:石原生久代解説員)を開催しました。

◆2月10日(日)は「第23回開館記念感謝DAY!」と題して、もちつき体験、フェルトのストラップづくり、読み聞かせ、かんじき体験など、いろいろなイベントを開催しました。この日は常設展示も無料でご覧いただきました。



もちつき体験のようす

◆2月16日(土)、はくぶつかんクラブ「雪あそび～かんじき体験」(講師:山田祥子学芸員)を開催しました。

◆網走市立南小学校3年生の総合学習でつくられた壁新聞「知っているようで知らない網走の魅力にせまろう!あばしり新発見!～観光客に伝えたい」で、7名が当館のことを紹介してくださいました。7枚の新聞は、1～2月に当館ロビーで展示しました。

◆3月17日(日)、講習会「フェルトのアザラシづくり」(講師:笹倉いる美学芸員)を開催しました。

お知らせ

◆北方民族博物館のポケットティッシュができました。網走市内のホテルや観光施設で無料配布しています。



北方民族博物館だより
No. 88

平成25(2013)年3月22日発行
 編集・発行 北海道立北方民族博物館
 〒093-0042 北海道網走市宇潮見309-1
 Tel 0152-45-3888 Fax 0152-45-3889
 e-mail: tonakai@hoppohm.org
 http://hoppohm.org
 指定管理者

財団法人北方文化振興協会